

取組実績の概要 【2ページ以内】

東京農工大学、茨城大学、首都大学東京の三大学では、平成25年度より、ASEAN各国の大学（AIMS大学）との間で、学部生の交換留学プログラム“AIMSプログラム”に取り組んだ。成長著しいASEANの現状を目の当たりにし、ASEANが直面する課題の解決に協働で取り組み、ASEANと日本との架け橋となる実践型グローバル人材を育成するため、4セメスターにわたってAIMS大学との間で単位互換を伴った1セメスターの相互交流（派遣・受入）を実施した。

推進に当たって、国内連携大学がコンソーシアムを構成し、協働・連携してプログラムを構築した。派遣プログラムについては、三大学の学生全員が学ぶ**事前教育**として「東南アジア地誌」を開講し、東南アジアの文化環境を文化の流入の観点から歴史的プロセスに基づいて理解した。受入プログラムについては、三大学が協働して行う**共通教育**や**乗入科目**の開講、**ラップアップ・プログラム**などを実施した。これらにより、単に自国以外で学修するというだけでなく、日本と東南アジアの関係を意識しながら、自身の専門分野を超えた幅広い視点が身に付くような構成とした。

この間、以前から大学間交流協定を締結していたAIMS大学に加え、AIMSプログラムを実施することの効果として次第に**連携先大学を拡大**しており、当初の構想時に比べて新たに8大学との間で協定を締結し、これに伴い交流学生数の目標についても上方に修正した。事業終了時までには6か国15大学との間で学生交流を展開しており、累計158人の日本人学生の派遣、195人の留学生の受入を達成した。

本構想では、AIMSプログラムの実施を通じて大学院ダブルディグリー・コースを構築することを目標として掲げていたところであるが、ボゴール農科大学（インドネシア）、ガジャマダ大学（インドネシア）と協定を締結し、**修士課程ダブルディグリー・コース**を設置した（平成28年、平成29年）。

〔実践的な開講科目〕

本構想では、三大学の連携の強みを活かすべく三大学協働で実施するもの（**共通教育**）と、各大学・各コースの専門性を発揮するもの（**専門教育**）の双方を織り交ぜたプログラム構成とし、三大学コンソーシアムで4つのコースを開設した（70～100科目を開講）。各コースとも、日本の教育内容で優れている点であり、AIMS大学からのニーズが高い、**実習型・研究型**の授業を中心としたカリキュラム構成とした（実験技術の習得、フィールド調査・体験型実習、受入学生の専門分野に応じた研究室への配属による短期研究プロジェクトなど）。

〔プログラム・コーディネーター等の配置による学生支援〕

学部生の派遣・受入を、組織的に大規模で実施する上で、各コースに**プログラム・コーディネーター**を配置し、学生の支援を行った。連携先大学との日常的なやり取りから交流プログラムの調整、留学前の学生へのガイダンスや留学中のケア、履修登録や単位認定手続きのサポートまで、幅広く対応することにより、スムーズな学生交流が可能となっている。

〔派遣学生の語学力の向上〕

TOEICにより英語力の伸長度を測定しており、各大学とも留学前後で100点程度スコアを伸ばす結果となった。特に、発信力に焦点をあてたTOEIC SWの結果では、留学前後のスコアにおいて10点以上の伸びを示し、企業において1～2年の海外滞在経験があるレベルにおおむね到達した（平成29年度派遣学生の平均。農工大）。帰国後の面談からは、英語でのコミュニケーションに対する自信の高まりが見られた。

〔大学院課程との接続〕

これまでにAIMSプログラムで受け入れた学生のうち3人が、受入先大学の大学院に入学を果たしている（このほか、1人が進学予定）。

また、派遣学生の多くが大学院に進学しており、AIMSプログラムを経て、ボゴール農科大学（インドネ

シア)との修士課程ダブルディグリー・コースへ1人が進学したほか、大学院進学後に本プログラムで派遣されたAIMS大学に再び留学する学生や、他の留学プログラム(世界展開力強化事業～中南米との大学間交流形成支援～等)に参加する学生、さらに海外の大学院へ進学する学生も現れている。

このように、学部生の段階からグローバルな感覚が養われたことで、留学に対するモチベーションが更に高まり、大学院課程まで含めたトータルな人材養成システムが確立されている。

〔学生の意識の変化〕

受入学生に対するアンケートでは、実験や研究に関する技能・知識の向上のみならず、9割の学生が「異なった文化・生活環境を持った人と協調できる能力を身に付けられた」、「ASEAN地域の持続可能な発展に向けて課題解決に取り組む意欲が増した」と回答しており、高い満足度が得られた。

また派遣学生に関しては、多くが大学院に進学しており、留学の経験を活かした研究テーマに取り組んでいる。ASEAN地域への理解が深まるとともに、自身の専門分野に対して多角的な視点から研究を進めることができるようになった。AIMSプログラムでの留学経験が進路の選択に影響を与えているケースも見られる(途上国の環境問題や都市問題を解決するべく、開発コンサルタントの仕事に就職)。

〔補助事業終了後の展開〕

補助事業としては平成29年度で終了したが、このように大きな成果が現れていることを踏まえて、学内予算の確保、奨学金プログラムの活用などにより、引き続きAIMSプログラムとして**1セメスターの学部生交流**を実施する予定である。また、学生の選択肢を拡大し、プログラムを活性化させるため、連携先大学の新規開拓を積極的に進めている。すでに平成30年度において、三大学コンソーシアムとして47人(農工大農学部9人、農工大工学部18人、茨大15人、首都大5人)の学生を派遣し、56人(農工大農学部13人、農工大工学部15人、茨大19人、首都大9人)の学生を受け入れる予定となっている。

○農工大…マレー工科大学(マレーシア)を連携先大学として追加し、平成30年度よりセメスター交流を行う予定である。さらに、これまでの実績・成果を活かして、AIMS加盟大学・ASEAN諸国に限定しないプログラムとして、「学部生セメスター交流プログラム」を推進する。具体的には、ミュンヘン工科大学(ドイツ)、インドネシア大学(インドネシア)に、1セメスターの学部生派遣を行う。

○茨大…農学部・理学部等の一部の学部を対象としていたが、AIMSプログラムによる交流がもたらすメリットの大きさを踏まえ、全学的プログラムに拡大した。さらに、平成29年度に発足した全学教育機構が所掌する**大学共通科目としてAIMS科目を位置づけた**。このことにより、英語で授業を行う専門科目として、日本人学生向けの英語力強化プログラムにも活用していく方針である。

○首都大…より多くの大学との連携を目指すことに加え、「都市」の視点から学部の枠を超えた連携分野の拡大を目指す。また、受入体制の強化を図るため、英語で実施する講義や実習をさらに増やすとともに、講義や実習のバラエティも増やすことを検討する。

なお、継続に当たっては、三大学コンソーシアムとしてのこれまでの連携・協力体制を維持しながら、派遣学生・受入学生の双方に対してプログラムを提供する。

【本事業における交流学生数の計画と実績】

すべての年度において計画数を上回っている。

	平成25年度		平成26年度		平成27年度		平成28年度		平成29年度		合計	
	派遣	受入	派遣	受入	派遣	受入	派遣	受入	派遣	受入	派遣	受入
計画※	0人	0人	27人	27人	30人	30人	41人	41人	54人	54人	152人	152人
実績	0人	0人	29人	35人	32人	44人	41人	54人	56人	62人	158人	195人

※AIMSリスト掲載大学の変更に伴う計画の変更がある場合は、変更後の交流学生数を記載している。

特筆すべき成果（グッドプラクティス）【1ページ以内】**〔バディ活動の充実と多文化理解の深化〕**

学生による**バディ制度・サポートクラブ**等を組織し、ラボワークや日常生活のサポートに加え、学生の自主的な活動（日本語クラスや文化体験、学園祭等）など、学修・日常生活全般について手厚いサポートを行った。例えば農工大では、平成29年度は300人以上の学生が登録しており、大きな活動となっている。

来日前の受入学生向けの日本語学習として、日常会話で使えると便利な日本語についてまとめた日本語テキストを作成したり、渡日直後の生活に慣れていない時期には、キャンパスツアーや周辺環境の案内、ウェルカムイベントや日用品の買い出しのフォローなど、バディ学生がチームを組んで対応した。このことにより、受入学生は日本での生活にいち早く慣れるとともに、**学生同士のネットワークが構築**された。

AIMS受入学生のみならず、他の外国人留学生との交流も自主的に推進しており、学内の国際化に大きく貢献している。平成30年度においても、すでに新たなバディがチームごとに組織され、受入に向けた準備やイベントの企画を始めている。

これらの活動は、日本人学生自身の学びにもつながった。ASEAN諸国の文化や宗教（特にハラール）などについてバディ学生が自主的に学ぶ場が設けられたり、学生が交渉した結果、学生食堂においてイスラムに配慮したメニューが出されるなど、多文化の中で生活することの理解が深まった。さらに、日本にいながら異文化の体験をすることで、英語を活用したコミュニケーション力に対する意識やASEAN諸国への関心、留学に対するモチベーションを高めることにつながった。実際、バディとして活躍した学生の中から、セメスター派遣学生が多数輩出されている（セメスター派遣学生の半数以上が、バディ活動の経験者）。

〔ダブルディグリー・コースの構築〕

AIMSプログラムの実施を通じて、連携先大学の関係が強化された。それぞれの単位制度を踏まえた単位互換の方法や修士論文の取扱いなど、コース・カリキュラムの構築に関する協議を経て、ボゴール農科大学（インドネシア）、ガジャマダ大学（インドネシア）と協定を締結し、**修士課程ダブルディグリー・コース**を設置した（農工大。平成28年、平成29年）。この蓄積を踏まえて、かねてより研究ベースで交流のあったミラノ大学（イタリア）との間で、修士課程ダブルディグリー・コースを設置した（農工大。平成30年3月）。

〔海外派遣プログラムの拡大〕

ASEAN諸国への関心・理解を深めるため、また、語学力を強化し英語でのコミュニケーション力に対する意識を高めるため、学部1～2年次を対象として、海外（AIMS大学のほか、シンガポール、英国、オーストラリア）への2～5週間程度の**短期派遣プログラム**を実施した（農工大、茨大）。例えば農工大では、これまでにAIMSプログラムに参加した学生のうちの約6割が短期派遣プログラムに参加しており、学部1～2年次からの意識喚起が効果的であることがわかる。

〔プログラムの自立化〕

AIMSプログラムの推進が直接的・間接的な契機となって、各大学とも、

- ・運営体制の構築・強化

- …**学内組織の設置**によるプログラム運営体制の強化。三大学共通プログラムの継続。

- ・日本人学生・外国人学生の双方が留学しやすい環境の整備

- …相談対応・助言、ガイドブックの整備、二言語化の推進などによる学生支援体制の強化。

- ・AIMS開講科目の共通教育化

- …英語で授業を行う科目として位置づけ、日本人学生の受講も促進。留学生との活発なディスカッションやグループワークを通じて、更なるグローバル化に貢献。

に取り組むこととしている。AIMSプログラム培ったリソースを最大限に活用することで、プログラムの充実・発展的な推進が図られている。